

アルパック ニュースレター



“現代版・番茶茶屋”として生まれ変わった「榎木館」（本文中に関連記事があります）

アルパック ニュースレター もくじ

1996年3月1日

- アルパック創立30周年へ 2
- オープンハウス「榎木館」 4
- 小樽の観光まちづくり探訪 6
- 伝統的な在来工法の木造住宅のすばらしさを味わう 7
- 新刊旧刊書評紹介 8
- まちかど 10

NO. **76**

アルパック創立30周年へ

アルパック・ベンチャーの道程と展望

— < 経営 > の原点と指針 —

三輪 泰司

「創業」とは、多かれ少なかれベンチャーです。そして「経営」は常にベンチャーです。

ベンチャー・ビジネス成功の5つ条件とか3つの要件とか言われる法則或いは原理は、実践の中でこそ活きた指針となります。

アルパック経営の“原点”はどこにあったのでしょうか。そしてどのように“指針”を獲得してきたのでしょうか。

一つの個別的事例ですが、そこに普遍的な原理・原則を見て頂ければと思います。

ベンチャーの原点

アルパックは、1966年9月14日、万国博会場計画第2次案まで完成してきた3人のメンバーが百万遍の東にある“進々堂”で、プランニング・コンサルタントとかいうことをやろうと決心した時から始まりました。翌早春1967年2月3日、節分祭で賑わう吉田山山麓に小さな民家を改修して、“アトリエ・アルパック”をオープンしたことは、実は大変なリスクでしたが大きな意味をもっていました。

約3ヶ月後の5月1日、胎動期の6ヶ月と際立って違うのは、2つの機能を得たことと喜びを込めて総括しています。

広く外へ向かっては、コントロール・センターであり、お客さんに来て頂ける“港”を得たこと、内においては、集約的に作業の出来る“工場”を得たことと記しています。そして最も重要なことは「会議の定例化」—毎週月曜日早朝の作業会議と毎月第1土曜日のゼミを確立したこと「経営者責任」を明確にしたこととの2点であると加えています。

しかし、その頃の日誌に、一番心配なこと

はお金だと書いています。これが本音です。

前の職場を辞めたのですが退職金は無し。準備期の6ヶ月は収入も無し。アトリエを開設するにも担保は無し。

受託によって成り立つ業態ですが、実績も無しで、受注も無しでは成り立つはずがありません。なんとか父に保証してもらって信用金庫から借金して初期投資をしましたが、返済のめども無し。

この業態は、製造業と比べて設備投資は少なくて出発できます。見込み生産による在庫商品を抱えることもありません。しかし、在庫の効かない人間の知的労働力を抱えます。

また、この業態での商品販売力とは、受注一営業力です。

しかし、よく見ますとその知的労働力こそが、付加価値を生み出す源泉であり“アルパック”としては実績はありませんが、小さなアトリエのオープンに300人も来て頂いた人のネットワークがありました。これこそが経営資源です。

大袈裟に言えば、ここにアルパック・ベンチャー経営の哲学的・実践的基礎を見つけました。

アルパックで、経営—営業・業務・管理及び教育の全てに付く“科学的”という接頭語には民主的という意味も含まれています。

その具現化が“合意形成”と“責任集中”です。内外のストックを活かし動かすソフトウェアの“原点”は「定例会議と経営責任」でした。これは少なくとも知的産業におけるベンチャー経営の普遍的原理です。

理念と方法の進化

冒険とは生きて帰ってくることに、不世出の冒険家の言葉にありましたが、ベンチャーも同じです。綿密な準備なしには冒険と言えないように、定例会議は個人の創造力を引き出し、集団の総合力を整える民主主義です。

冒険とは、自己犠牲をかえりみず、夢へ向かっての挑戦であるように、ベンチャーはリスクを覚悟しなければなりません。複数の人間からなる集団となった時、それはリーダーの即ち経営責任となります。

前人未踏の道ですが“道”は歩くことによって出来てきます。ベンチャー・ビジネスの経営は、ブースターに点火し、引力に抗して飛びたち、軌道に乗ってからの本番です。

急速に成長しますと、成長してから参加してきたメンバーと意識の“温度差”が現れるのは当然です。創業期を知っているメンバーでも、問題意識の違いが露呈したりします。

量的変化に応じて質的变化が起こってきます。もはや個人保証では応じられない財務規模になってきます。

そこで“原点”にすぐ追い掛けて、意識注入とシステム整備を始めねばなりません。

先ず、理念と方法―「綱領」です。いま、急速に進んでいる国際品質保証(QA)規格ISO-9000シリーズで言えば、会社の基本方針声明―Policy Statementです。均等な品質を提供することは消費者への責務ですが、理念と方法は、それを達成する独自の個性を消費者―委託者へアピールし、内部ではアイデンティティを共有することです。

港と工場ともう一つ、勉強部屋を持ちました。議論にはヒマと若さが味方しました。性格規定、職能倫理、そして基本理念を確定。

いかなる資本系列にも属さず、自主・自立で、しかも首都でない地方から出発したので

「地域に根ざした現地主義・実証主義・総合主義」一言でいうと“現実主義”の方法が確立しました。これはソフトウェアです。

「幅広い分野の研究者、専門家、実務家の指導を得て、社会進歩のために、住み良く美しい都市、農村、豊かな国土づくりに役立つ若々しいエネルギーの核となる。」これはハード・ソフトに加えてのハートウェアです。

システムの刷新と展望

プランニング・コンサルタントを軸に、シンクタンクが先端を拓き、建築設計・ランドスケープの技術提案に貫く業務と組織の構造は、規模に応じて型を成してきました。現実主義の経営管理システムは、25年程掛かって整いました。

この構造とシステムが、理念と方法と結んで“ドゥータンク”と言われる有言実行、広範な社会奉仕の活動スタイルとなって現れ、アルパックの存在感を特色付けてきました。

この特性を発揮した典型が、1977年2月から始まった関西文化学術研究都市構想の立案と推進でした。その結果、見つかったアルパック経営成長へのキーワードは、奉仕精神―Voluntarism、国際性―Internationalism、及び情報化―Intelligenceの3つでした。

5年前に模索した“ニュー・コンセプト”が見えてきました。

ベンチャー3つの要件―営業力・業務(技術力)・管理能力をオールマイティに持つ次世代経営陣は、奉仕・国際・情報のシステム構築、即ち、積極的な社会活動、生き活きたマニュアル整備及び情報ネットワークの構築をリードし、定期会議と経営責任の“原点”を帯した人材から生まれるでしょう。

それが、アルパックがベンチャーであり続ける要件です。

(代表取締役会長 みわ ひろし)

オープンハウス「榎木館」

市民の手による近代建築の保存と活用

吉田 道子

■時間の住む空間

ガラス越しに陽が降り注ぎ、温もりが広縁を通過して和室に届く。まだ時折雪の舞う季節ではあるが、ここは不思議に暖かい。やがて木の棧がカタカタと震え始め、冷たい冬の風の再訪を告げる。

移り変わる時間や季節を幾度となく呼吸し続けてきたこの部屋には、今もひっそりと、しかし威厳を持って「時間」という住人が暮らしている。この住人は畳に敷かれた絨毯、テーブルと椅子、新しい住人たちを拒むことなく許容し、歓迎さえしてくれているようだ。



窓越しの庭

■現代の「番茶茶屋」への蘇生

ここは名古屋市東区榎木町。北側の主税・白壁町筋とともに、名古屋城下の武家屋敷町としての歴史を持ち、市内4つの町並み保存地区の一つに指定されている。

重厚な趣の日本家屋や黒く連なる板塀などの近世の面影と併せ、明治以降居住した貿易商・財界人が好んで建てた洋館がエキゾチックな文化の香りを漂わせる町である。

大正14年に建てられた井元邸もその一つで、60坪の敷地に100坪の日本家屋と60坪の洋館が並び、広い日本庭園には移築された茶室が

備えられている。数年前から空き家で、ご多分にもれず、マンションへの転換が迫られていた。

この話を耳にしたデザイン会社社長の伊藤晴彦氏(インダストリアルデザイナー)は、非営利による管理を市民の手で実現しようと“再利用プロジェクト”構想を半年以上かけて練った。大家の井元氏とのやりとりの中で、実費以上の経費を出さないことを条件に、5年間の期限付きで“現代版・番茶茶屋”として利用することを承諾してもらった。番茶茶屋は、名古屋都心の久屋大通りに江戸から明治にかけて実存した茶屋で、人々が気楽に立ち寄って話し合える場だったという。

この家は、実際には長年生活の場としての利用はされていなかった。時を経、「榎木館」という名で新たな住人を迎え入れることとなった。

■顔見知りの他人、という共同体

「榎木館」に新しい住人たちがやってきたのは、去年の暮れ。お披露目は1月20日だった。あれよあれよと予想を遙かに超えた500人以上が入れ替わり立ち替わり訪れ、中には6時間も居続けた人もいたとか。わいわいつ



玄関ホール

つく鍋料理もさることながら、木や和紙、土・漆喰などの自然素材を用い、一つひとつ手仕事で仕上げた建築空間には人を心身ともに和ませる不思議な力があるようだ。

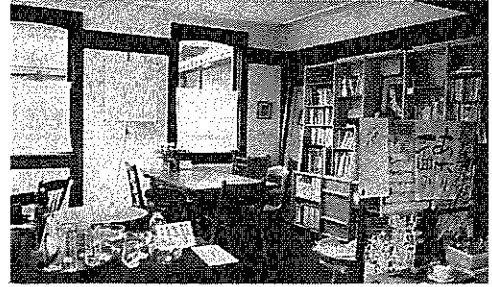
さて、この吸引力と伊藤さんの人柄に惹かれて集まった店子は、建築の大学講師高橋さん、建築士の小栗さん、フリーライターの浅田さん、舞台関係の斎藤さんご夫妻。

洋館の2階に小栗さんの事務所、1階は浅田さんと妹さんのギャラリー兼喫茶「自由空間」。地域住民との接点、さまざまな出逢いの場となる、まさしく番茶茶屋だ。日本家屋には、24時間ここに住み、本業の傍ら「榎木館」の管理を請け負う斎藤さん夫妻の居住スペースと伊藤さんの会社の分室、高橋さんの書庫がある。

住人にはそれぞれお役がある。火付け役の自称ガキ大将に、ご意見番、世話役、浪人(?)…。放って置いても自ずと役が付く。押しつけたり、ルールを作ったりしない。全員がお互いをよく知っているけど、仕事など直接的な関わりのない「顔見知りの他人」が殆ど。年齢も60歳代から20歳代まで幅広い。実はこれから5年間、同じ住人として「うまくやっていく」ための知恵といえる。声は届かないが誰か人がいる、必要なときはたずねていく。ひとつ処に暮らす長屋の住人のようなつきあいがいいという。ここにはコミュニティの一つのあり方が示唆されている。

■市民の手で向上させるまちの評価基準

廊下で囲まれた二間続きの座敷は計23畳。会合やワークショップの場にこの“オープンスペース”を開放しているが、申し込みも多く、趣旨に沿った利用を促すため、現在では住人主催または友だちに限定している。単なる部屋貸しでなく、コミュニティを大切にしたいとの思いからだ。



自由空間内部

「自由空間」のギャラリーの他、ホールや廊下の隅など、随所にクラフトコーナーがある。伊藤さんの会社が事務局を勤めるデザイナー団体の会員の作品展示の場になっている。

「榎木館」の住人たちの夢は大きくふくらむ。みんなが知恵や技を持ち寄って、文化を軸に「榎木塾」を開くこと。まず、子どものためのワークショップ。ものづくりを通して「自分はどうしたいのか」を知り、「こうしたい」といえる大人になって欲しいと願う。

市民自らの手でまちの評価基準を上げることが、まちづくりには重要との考えには全く同感である。「榎木館」が市民(住民)にとって、出逢いの場、コミュニティや文化を育む場となって、小さなまちづくりの運動が始まるなんてこんな素敵なことはない。

「自由空間」には住まいづくり、まちづくりに関わる図書コーナーがある。3月には初めての企画展として『まちづくり絵本展』を開催する。また、いろいろな出逢いが生まれることだろう。

2001年、「榎木館」の新たな出発^{たびだち}——。五年後には、住人たちは「榎木館」を去る。この家もなくなるかもしれないが、今度は店子5組によって名古屋のまちにオープンハウス「榎木館」が5つできることになるだろう。

(名古屋事務所 よしだ みちこ)

小樽の観光まちづくり探訪

高野 隆嗣

港町における観光まちづくりの先進地視察ということで、昨年末に訪問した小樽の近況について報告します。小樽は運河を中心としたまちづくりの黎明期に、歴史的な建造物の調査や景観計画をアルパックの先輩方がお手伝いするなど、関わりが深いまちです。

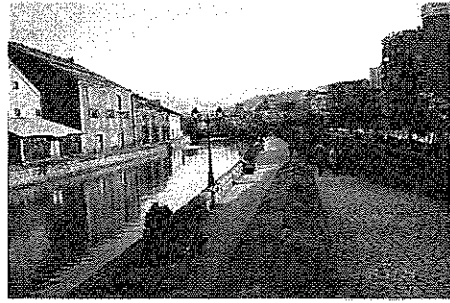
来訪者で賑わう「メルヘン交差点」

ガイドブックによれば、「小樽観光と言えば運河散策、鮮度抜群の寿司、おみやげはオルゴールとガラス工芸」なのだそうです。いずれも観光客で大変賑わっています。特に、「メルヘン交差点」周辺は、倉庫を改装するなど工夫を凝らした建物が並び、ガラス工芸店やオルゴール店が軒を連ね、人（特に若い女性グループ）で溢れんばかりの大盛況です。小樽まちづくりの中核＝運河

見どころ満載の小樽ですが、何といたっても色内通りから運河にかけて中心市街地のまちづくりには目を見張るものがあります。特に、色内通り周辺は、日銀小樽支店、旧安田銀行（北海道経済新聞社）などの近代建築群が軒を連ね、国際貿易港として「北のウォール街」と呼ばれた時代の栄華を色濃く残しています。この通りから運河にかけては、サインや街路灯はもちろん歩道の整備もほとんど完成しており、まさに小樽観光まちづくりの中核と言えます。

小樽のまちづくりに新たな展開

まちのシンボルとして、市民のみならず多くの来訪者を楽しませてくれる運河は、言うまでもなく市民運動を基礎とした十数年に及ぶまちづくりの成果です。そして現在、運河沿いの石造倉庫群において、これらを再生・



小樽運河の散策路

活用したまちづくりが進められています。

今回、我々が訪れたのは、「小樽ビール」を製造・販売する「小樽倉庫No.1」です。北海道地域計画建築研究所の藤本さんのご紹介で、仕掛け人である㈱アレフの鈴木さんにもお話しをうかがうことが出来ました。まちづくりの一翼を担う「小樽ビール」

本誌でも再三、報告されているように、全国各地で地ビールが展開されています。これらと「小樽ビール」の違いについて、鈴木さんは「明治・大正期にいち早く西洋文明の栄華を誇り、今もエキゾチックな異国情緒の漂う港町小樽こそ、地ビールのロマンを語るイメージに相応しい」と言います。

また、「小樽倉庫No.1」では当初から、運河を中心としたまちづくりを強く意識し、①小樽港湾地域の再開発への貢献、②小樽市景観条例の遵守、③小樽市のまちづくりへの貢献、をプロジェクトの目標として位置づけてきたそうです。鈴木さん自身も、旧手宮線の線路敷を活用したまちづくりなど、「地元に着目して、小樽市民の一員としてまちづくりの一翼を担いたい」と語っておられました。最高のビール＝小樽ビール

「小樽倉庫No.1」の店内は倉庫の素地を上手に活かしながら改装されており、中央のブルーハウスを取り囲むように配したハイカウンターやハンドメイドテーブル、ビールギャラリーとして19世紀のビール製造具を展示し

きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況

た中2階など、楽しく落ちついた空間が提供されています。

さて、「最高のビール」をつくるため、本場ドイツから最高位の技術者と良質の原材料を仕入れているという「小樽ビール」のほうは…。どうぞ、ご自身で確認下さい。

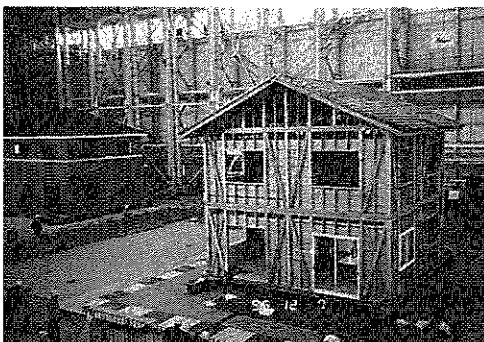
(京都事務所 こうの りゅうじ)

伝統的な在来工法の木造住宅の すばらしさを味わう

松木 一恭

ガタ！ガタ！ドドッ！加速度 816ガルの地震振動（＝阪神淡路大震災時の地震加速度）を多度津（香川県）の原子力発電技術機構試験所で体験してきました。思った以上の地震振動であったことがわかり、思わず身震いをしてしまったしだいである。

実験体は、建築基準法の約 1.5倍程度断面が割り増しされた柱、筋かいなどで構成されていた。実験後、倒壊しなかったものの、筋かいが桁を押し上げ、桁と柱が十分に緊結されているために柱が土台をひっぱり、土台が割裂していたことが頭から放れない。又、柱と土台を止めていた金物が浮き上がっていたことも。その反面、構造材とは言えない内装用ボードの下地材が柱と柱の間の壁を一つの構面（構造を形成している面）として築き



実大震動実験で用いられた試験体

（筋かいでは、一つの構面として築けないのでは）頑強に地震に抵抗していた。

これまで人々は、木が繊維を持った生き物であり、そのことを理解した上で随時、管理しながら木造住宅と暮らしてきた。そうすることで数百、数千年間木造をもたしてきた。

これらの状況をみていたときに、「西岡常一と語る木の家は三百年」という書籍を思い出した。その中で、法隆寺、薬師寺などを再現修復された西岡棟梁が「筋交いは、初期剛性は高いが、力の強い圧縮や引張り時においてはもたない。通し貫の場合は、強い」と言われている。

今回の実験でも西岡棟梁の言われていることが判明されていると思われる。

そして、西岡棟梁は、「人間が功利的に考えてしたことはみなあかんということです。自然のままの木をなぜ良しとしないのでしょうか。そこに学問がいきませんのや、いまの建築学という学問はね、様式論で終わっているわけです。材質に学問がおよびません。

もう少し人間の経験、歴史の中での直感を大切にしてもらいたい。コンピュータより、人間の天与の知恵のコンピュータがよろしいわ」と言っている。

また、「建築基準法は、あきませんわ」とも。

ちなみに、わたしの親も大工であり、西岡棟梁と同じことを言っている。

あやまちが災害で検証されないために、生命を奪う功利的な実験や研究ではなく自然や歴史の本質を理解し、経験をもった本物の人が言っていることを検証する実験や研究がされる時代が来ているのではないだろうか。

(京都事務所 まつき かずやす)

石川 英輔 著

PHP研究所

『2050年は江戸時代』

紹介 福岡 雅子

今年の年賀状に、『環境白書（平成七年版）に、人類の文明が環境に影響を与え、当時の文明が対応できない程度に環境が変化し、文明が減っていった過去の例が述べられています。縄文時代や江戸時代の文明は持続的であったともいわれています。』と書いたところ、友人が紹介してくれたのが、本書である。

著者の石川英輔氏は、もともと技術者でありながら、江戸時代における省エネルギー生活の紹介とそれをモチーフにしたSF小説を執筆するユニークな作家である。私はこれまでに、氏が江戸時代の生活を紹介した「大江戸えねるぎ事情」「大江戸テクノロジー事情」「大江戸リサイクル事情」の3作を読んでおり、江戸時代の生活が持続可能な開発そのものであったことを知って非常にうらやましく思っていた。江戸時代には不便なことが沢山あっただろうが、生活の知恵があふれた豊かさも沢山あったようなのだ。

本書は、前述の3作とは異なり、近未来のSFである。現在の日本の文明が産業構造の変化や環境影響などによる食糧危機に耐えられず、まさに滅びかけたところで、持続可能な江戸時代に似た社会を築き上げる。なぜ文明の滅亡まで到達し、「大刷新」と呼ばれる社会システムの根本的変更を行ったのかについて、2050年に20代の世代が、長老にたずね、長老が語るスタイルで物語が展開する。

『（本文より）大刷新の前に、今では、江戸時代の次の「東京時代」と呼んでいる華やかな時代があったこと。そして、工業化の行き過ぎで完全に行き詰まり、それ以後、二度と過去の過ちを繰り返さないように生活全体

を見直しながら今のような農業社会を作り上げたという話は、若い世代なら耳にタコができるほど聞かされてきた。』

それでも、若い世代は華やかな時代を作り上げて賢いはずの先世代が、なぜ過剰に資源やエネルギーを使い、大量に廃棄物を捨てていたのかを理解できない。大量生産で二倍の量を作って単価を半分にするなら骨折り損のくたびれもうけだと思ってしまう。

私達の世代には、50年前の戦争や高度成長時代初期のことが実感としては全く理解できず、祖父母や父母の話によって憶測するだけである。それからすると、私達の子や孫の世代も、どのような将来を迎えるのであれ、現在の私達を恐らく理解できないだろう。

2050年に87歳である村の長老、本山悟一郎と私は全く同世代である。現在の繁栄が当分続くとしても、あるいは、環境が悪化してエネルギー利用を徹底的に見直す時代が到来するにせよ、私達の子や孫の世代は私達のことを知恵が足りずに不思議なことばかりしていた昔の人と思うかも知れない。その時になって私達は、現在私達がしていることについて、どのような説明ができるのだろうか。

さて、紹介してくれた友人の感想は「このシナリオどおりであれば、私達や子ども達も結構幸せといえる」であった。同感。

（大阪事務所 ふくおか まさこ）



新刊旧刊書評紹介

日本都市問題会議関西会議編

都市文化社

『都市の展望』

紹介 尾澤 律子

日本都市問題会議関西会議は京阪神の3都市の都市問題に関わる行政、学識者、民間人の有志が集まり昭和57年に発足、以来継続して研究会を行っており、弊社アルパックも3都市の1つ京都の事務局としてお手伝いさせて頂いております。

当会議では2年毎に活動記録として本を出版しており、「都市の時代」「都市の再生」「都市の魅力」「都市の未来」「都市の文化」とその数5冊を数えるようになりました。

そして、平成4年秋から6年秋までの2年間は視点をマクロにして社会の潮流変化の渦中にある日本の都市を中からでなく、外から巨視的に眺めて考えようということで「都市のグランドビジョン」というテーマで研究会を行い、今回その内容を「都市の展望」という本にまとめました。

都市づくりを長期的・広域的にとらえ、まず第1部で目指すべき都市像を議論し、その後第2部でその都市づくりの方法・手法論をそして、最後の第3部で未来に向けての都市についてという3つの切り口を設けました。

テーマがマクロ的にだったら、論客もマクロで各界からの時宜を得た示唆が集められているのが当会議の特徴と言えると思います。行政の方からは具体的な計画・施策、学識者からは国際的視野にも広げたテーマ論等、民間の方からは最先端の事業等を次のようなサブテーマで話して頂いております。

最初の「都市づくりの目標」では環境問題まで広げて、都市居住の魅力と問題、地球環境、エネルギー問題を論じ、そして「都市づくりの方法」では都市圏と広域行政、都市づ



くりと行政手法、それを支える都市社会資本と財源を、最後に未来に向けての「21世紀の関西都市圏」については今最もトレンドな国土軸と関西、首都機能移転と地方分権について論じられています。

グランドビジョンというテーマは大きく、議論すべきテーマの絞り込みには一苦労して、そこにはテーマ選択の意味と重さがありました。先日、京都の団体から発行された京都グランドビジョンについての冊子に「浅き夢見し」という題を見つけました。夢やビジョンという言葉の中には良きものという固定的イメージがあるように思われます。でも、生きる人間である私達は当然夢とは表現できない将来ビジョンの検討をグランドビジョンに入れる辛苦も必要なのでしょう。

くしくも、このテーマにおける2年間の研究会の後、3都市の1つ神戸に大地震が起きました。神戸の方々にはその後ご多忙の中を出版にもご尽力頂き報告書としてさらに深重なものになりました。この本が21世紀の関西の都市像へのひとつのモチベーションになることを願うばかりです。

なお、本をご希望される方はアルパックまでお知らせ願います。

(京都事務所 おざわ りつこ)

まちかど

段ボールハウスその後

小林 佑造

新宿西口の地下通路の段ボールハウスにいつの頃からか絵が描かれだし、それが何とも地下通路の臭さを和らげているそんな気がしていましたので、今回はその段ボールハウスアートを紹介するつもりでいました。しかし、皆さんご存じのように動く歩道をつくるのことで先日強制執行並みの物々しきでハウス撤去が行われました。

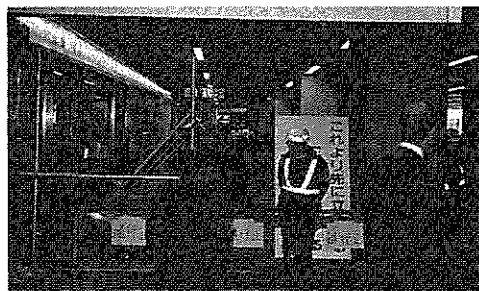
新宿は昨年ホームレスの数が増えてきたと感じていました。バブル崩壊後、その数は500人近くにも膨れ上がり、食糧確保が出来ない人もでたため、1年半前から新宿区役所が一日一食のカップめんと乾パンを「無条件給食」として支給したそうです。当初1日70~80食だったものが、「新宿は暮らしやすい」と給食者が移り住むようになって、多い時で一日500食もでてしまい、膨らむばかりの予算手当が大変だそうです。

生きていくためには「閉め出されない地下道があること」「食べ物の供給源となる飲食店があること」そして「小銭が拾いやすい雑踏」という三つの条件が欠かせないそうです。そういえば朝6時頃地下道を歩くと今の時期でも暖かく、帰りそびれたサラリーマンまでもが一緒になって眠っている光景に出合ったり、新宿は鳥の多いところですが、その鳥も先に餌場を取られてしまうために歌舞伎町か

ら追い出されてしまっています。また、雑踏の中でポケットから小銭を落とした時追い掛けていっても拾えないなどの経験がありませんか。

地下道から追い出された人たちは、西口の旧居住地近くに集団で炊き出しを受けながら工事が終わるのを待っているかの様にまた段ボールハウスを建てて今でも暮らしています。

(東京事務所 こばやし ゆうぞう)



その日の内に600mの仮囲いが完成



うず高く積まれた生活用品。
今はこの場所に炊飯しながら
また生活が始まっている



事務所の前にも一時避難所さくら荘
生活している人はこぎれい、どういふ歌が高い
フェンスが回されているが鍵はかかっていない

アルパック (株)地域計画建築研究所

- 本 社
- 京都事務所 〒600京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075) 221-5132 FAX(075)256-1764
- 大阪事務所 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06) 942-5732 FAX(06)941-7478
- 名古屋事務所 〒460名古屋市中区丸の内3-18-30・ツボウチビル2F/TEL(052)962-1224 FAX(052)962-1225
- 東京事務所 〒160東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
- (株)九州地域計画研究所 〒810福岡市中央区天神1-15-1・日之出ビル6F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673